

# 源氏物語爪印 東屋巻

村 井 利 彦

- 【1】前巻の垣間見を受ける冒頭。興奮はいつしか冷め、常識的判断に立ち戻っているところが、いかにも薫らしい。今のところ、浮舟は按察君のレベルの人である。「いと人聞き軽々しう、かたはらいたかるべきほど」（269）。
- 【2】浮舟の母の嫁いだ先・常陸介の家は子沢山。彼女も六七人産んでいる。世俗的実力の表示。常陸介は、かつての常陸介が空蟬をそうしたように、浮舟の母を溺愛したものと想像される。
- 【3】常陸介は、連れ子である浮舟を疎んじた。ちょっと継父物語の趣のする展開である。光源氏の逆継父物語である玉鬘物語、紫上の逆継母物語とのバランスを考慮しているのだろうか。
- 【4】疎んじられる連れ子を「いかでひきすぐれて、おもたしきほどにしなしても見えにしがな」（270）と思う母の姿は、紅梅巻の真木柱を彷彿させる。これで、紅梅巻の浮いた印象も解消されよう。紅梅巻は、浮舟の予告機能としてとらえる必要がある。
- 【5】「さま容貌の」「ものにもまじらず、あはれにかたじけなく生ひ出てたまへば」（270）。浮舟が美人であること、前巻の末尾で読者には充分承知のことだ。
- 【6】常陸介については、「守もいやしき人にはあらざりけり。上達部の筋」（270）と紹介されている。明石入道は、大臣の末であった。彼より一段劣るけれども、ほぼ同様の境遇の男として了解される。ここで、明石入道が、常陸介のように子沢山でなく、ただ一人の娘を愛育していた事実が、異様な風景として甦る。あれは、何だったのか。
- 【7】常陸介は、田舎者。なまる言葉。権門へのへつらい。狡猾。無風流。弓矢が得意。反源氏物語世界の代表者というべきか。浮舟は、こういう世界に根を張った人物であることをさりげなく言っている。その意味では、玉鬘の再来であろう。竹河巻の意味もこのあたりで効いてくるというべきか。紅梅・竹河の二巻は、浮舟物語の序として機能している。決してなおざりにしてよい巻々ではない。
- 【8】左近少将の登場。年齢二十三。「心ばせしめやかに、才ありといふかたは

人にゆるされたれど、きらきらしう今めいてなどはえあらぬ」(270)。二流の貧乏貴族といった印象である。紫式部時代、貴族がおちいりつつあった状況を的確に描写しているのではないか。

【9】左近少将と浮舟の結婚予定月は八月(272)。

【10】常陸介の田舎性、その教養の無さのスケッチ(272~3)。

【11】少将の「もの思ひ知りぬべき御心ざま」(274)を頼んで、母親が浮舟の素性を告白した結果、少将が翻意したのだから、少将とは所詮その程度の、「もの思ひ」などひとかけらもなく、自分の利益以外に目がない男であるということが明確である。田舎者の財力を利用しようという、いやしい貴族の、露骨で志の低い物語である。問題は、こういう貴族が、薫および匂宮の周辺に満ちてきているという現実にある。「もう思ひ知りぬべき御心ざま」の貴族が、極めて少数で孤立状態に近くなっているということである。物語は、かくて黄昏て行く。源氏物語が、もののあはれを知る者の世界だ、という宣長の主張は、この面では全く正しい。

【12】少将は、いみじくも言っている。「かやうのあたりに行き通はむ、人のをさをさゆるさぬことなれど、今様のことにて」(275)。これは今様の、現実なのである。貴族の黄昏。こういう時代背景があったからこそ、源氏物語は、過去の栄光を回想、物語れたのである。

【13】少将の言葉「さびしう事うち合はぬ、みやび好める人の果て果ては、ものきよくもなく、人にも人とおぼえたらぬ」(279)の実例を源氏物語に求めれば、宇治八宮。伊勢物語でいえば、紀有常か。

【14】少将の今様な処世訓。「すこし人にそしらるとも、なだらかにて世の中を過ぐさむことを願ふなり」(276)。王朝風中流意識。マイホーム主義。ミーイズム。

【15】「受領の御婿になりたまふかやうの君たちは、ただ私の君のごとく思ひかしづきたてまつり、手に捧げたるごと、思ひあつかひ後見たてまつるにかかりてなむ、さるふるまひしたまふ」(277)。仲人の言葉は、今様貴族の行動原理の証言。明石入道のことが想起される。ここの婿を嫁にかえれば、空蟬のことになる。

【16】この少将の家柄は悪くない。父は、大將(279)。彼が、今常陸介の婿に是非になりたいという行動に出ているところから想像するに、彼の家は、没落の過程にあるものと思われる。常陸介の財力でもって勢力の挽回を期しているものと考えられる。

【17】仲人口の実例(280~1)。来年は四位。今度の蔵人頭は疑いない。帝は約束している。上達部など今日明日にも。全くいい気なものである。今も昔も同じか。これを無批判に受け入れるのも、田舎者の証拠である。「あさましく鄙びたる守にて、うち笑みつつ聞きたり」。

【18】大臣の位を財力で手に入れるという事例も当時あったものと推定される(281)。

政治の腐敗、墮落のさまが仄かに見える。

【19】この仲人が仲人たりえたのは、浮舟の女房に妹がいたためである。当時の婿探しは、こういうルートが普通であったことが分かる。

【20】結婚を約束したその日に少将が、浮舟の妹のところに来るという設定も、露骨なこの話に相応しい。しかもこの妹が「まだ幼くなりあはぬ人」（285）で年端もゆかぬ年齢という設定も、少将のいやしさを語って余すところがない。乳母の言葉「心くちをしくいましける君」（285）。

【21】少将のようでない人、つまり乳母の言葉を借りれば「心ばせあり、もの思ひ知りたらむ人にこそ見せたてまつらまほしき」（285）。ここで薫が浮上する。少将は薫の露払い。はたして、薫はこの期待に応えることが出来るや否や。

【22】当時の権力者。右大臣（夕霧）、按察使大納言（紅梅大納言）、式部卿宮。（286）。

【23】もし浮舟が薫と結婚したら、母宮（女三宮）の女房で、時々薫の相手をする女となるだろうという母の判断は、常識というものであろう。浮舟が召人・按察君になる、ということである。⇒【1】。薫クラスの最高貴族と結婚する幸せを、母は中君の現実に照らして否定する。そして、言う。「いかにもいかに、二心なからむ人のみこそ、めやすくだのもしきことにはあらめ」（286）。これが、「わが身にても知りనికి」という自己の人生から帰納された断案であった。宇治八宮より、常陸介を選んだ人生を支えた理念が、二心なき愛という人生哲学である。この理念は、宇治八宮の世界観を否定するばかりではない。薫はもちろん、さらにその母体を形勢する、はるかなる光源氏の世界を支える理念に反旗をひるがえす発想である。反光源氏、反源氏物語の理念。二心ない愛という発想は、玉鬘の結婚問題の時、光源氏が考えた婿選びの選択肢であった。⇒常夏巻。作者が、源氏物語の最後の最後になって再びこれを持ち出してきた意味はいかなるものか。これまで宮々と積み重ねてきた世界を根底から転覆させる理念。はたして、作者は、この理念でもって源氏物語を閉じることが出来るのであろうか。

【24】「よろずのこと、わが身からなりけり」（287）という母の結論。空蟬の観念に似ている。源氏物語は、結局、空蟬を越えられない物語であるということか。

【25】妹との結婚は、突然のこととて用意もなにもない。浮舟のために用意した調度で代用するというのも、常陸介らしいドタバタ劇である。こういう男は、人目など考慮しない。善は急げ、思い立ったが吉日なのである。

【26】浮舟の妹の年齢。十五、六（288）。

【27】窮状を訴えた、浮舟の母からの手紙を見た時、中君の思い。「故宮の、さばかりゆるしたまはでやみにし人」（289）。浮舟の母に対して八宮は相当に怒っていたことが知れる。この母の行為には、許しがたいところがあったものと知れる。浮舟出生に纏わる疑義であろうか。浮舟が大君生き写しに成長した今となっては、

その怒りも根拠のないものと知れるけれども。しかし、ここで、母の罪を読者に意識させておくと、これから語ることになる娘の罪を親子二代にわたる血の騒ぎという側面から見る余地を残すことになる。作者の狙いもそのへんにあるか。

【28】中君に対する大輔の助言。「かかる劣りの者の、人の御なかにまじりたまふも、世の常のことなり」（290）。浮舟は、「劣りの者」なのである。

【29】浮舟は、二条院西対の西廂の間に移ることになる。二条院で一番西の部屋。西廂の北側、一番目立たない場所である（291）。

【30】常陸介の家では、彼の田舎臭い婿扱いのため、手狭になり、このままでは浮舟を「廊」に住ませなければならぬことになりそうで、二条院に緊急避難をした（291）とある。「廊」住むのは下屬。ちなみに紫式部は、土御門邸の「廊」にすんでいた。軽いジョークだろうか。知っている読者はニヤリとする場面。

【31】二条院で匂宮を見た母のショック（292～4）。彼女の中君観は一変する。「この御ありさま容貌を見れば、織女ばかりにても、かやうに見たてまつり通はむは、いといみじかるべきわざかな」（293）。この時、彼女の二心無き愛の哲学は雲散霧消したといえようか。⇒【23】。彼女も所詮田舎者なのである。六条院をみるまで、筑紫の栄華が日本一だと信じていた玉鬘一行の女房・三条のことが思い出される。浮舟の母は、一晚中思い続けた。「心は高くつかふべきなりけり」（294）。彼女はこの時、血迷ったのだ。悲劇の開始である。

【32】翌朝やってきた、今や妹婿となった少将は、匂宮の前では、その人とも分からぬほどのていたらくで、母は「いとどしくあなづらはしく」（295）思う。田舎者は、図に乗ったら思いやりのかけらもなくなるものである。

【33】「故上の亡せたまひしほどは、言ふかひな幼き御ほどにて」（295）。浮舟の母は、中君が生まれる前後のことを詳しく知っている。八宮に追放されたのは、中君が子供の頃であったのだろう。

【34】大君への中君の言及。「見果てぬにつけて心にくくもある世にこそは」（296）。夢は実現するまでが花。夢を保存したくば、見果てるな。大君が、薫の心につつまでも残るのは、見果てぬ夢であるからにすぎぬのかもしれない。生きていて、もし薫と添い遂げたなら、私のような運命にきつとなったことだろう。

【35】浮舟の母は、中年肥り。でっぷりとしている（298）。これから昼寝の好きそうな肥った女のことを「常陸殿」と呼ぼうではないか。

【36】八宮に追放された頃のこと。本人の証言。「つらう情なくおぼし放ちたりし」（298）。

【37】匂宮と入れ違いにやって来た薫を垣間見る母。匂宮と甲乙つけがたい印象。ここで、すでに内意を伝えてきている薫と、浮舟との結婚に一挙に母の心が傾斜するのは無理からぬ流れである。二心なき愛の理念はどこに行ってしまったのか。この理念、今や中君の側に存在するのではないか。

【38】薫是中君に対する未練心を捨てきれずにいる。その彼の心を少しずつ浮舟の方に、たゆみながら移行させてゆくのが、この巻の眼目なのである。

【39】「見し人の形代ならば身に添へて恋しき瀬々のなでものにせむ」（302）。浮舟を愛する薫の当面の実体を、この「たはぶれ」歌はあますところなく表現している。「形代」「なでもの」。これが、しばらくのキーワード。このぶんでは浮舟は、薫の「つひに寄る瀬」とは、とうていなれそうにない。

【40】近くに浮舟本人がいるのを知っているにもかかわらず、自分の気持ちをさりげなく伝えてほしいと中君に伝言して去る薫の行動様式と後の匂宮の行為を比較するとまことに対照的である。薫はすでに浮舟を見ているので、彼の心には、ある種の成算があって、こういう冗談めかしてはいるが、中君にゴーサインを出しているのだと考えた方がよいかもしれない。中君が仲人となる予定で、いまのところは舞台がまわっている。今は、母の同意をとりつける段階。

【41】母が、薫を見ての印象。「この御ありさまを見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ」（302）。匂宮を見た時の感想に同じである。⇒【31】

【42】薫の香について、女房は、法華経・薬王品にある牛頭梅檀の例を持ち出し解説する（304）。法華経薬王菩薩本事品を聞き、随喜讃歎した者は、この世にあっては、口から常に青蓮華の香を発し、身体の毛穴から常に牛頭梅檀の香を発する。その功德は、その人が女ならば、もう二度と女に生まれることがなく、命が尽きたら阿弥陀の極楽世界に往生でき、この世の苦しみから解脱できる。と、法華経に書いてある。これは、女人往生を説いた部分で、この記事をここで書いた意味はどういうことであろうか。自分は薫になりたい。あるいは、薫の世界にいて、薫に引かれて往生したいという女たちの心理形成が目的なのであるか。が、はたしてそれは可能なのか。「前の世こそゆかしき御ありさまなれ」（304）と女房は言う。薫は、その前世で、薬王品にあるように、体を燃やし、肘を燃やして、仏は供養したのであるか。

【43】中君は、浮舟の母に薫の意向を伝える。母が「ただ御心になむ」と応えたのは、自然である。

【44】「高きも短きも、女といふものは、かかる筋にてこそ、この世後の世まで、苦しき身になりはべるなれ」（305）と母は言う。だからこそ薫へ、という発想。牛頭梅檀を引用したのは、そういう流れをつくるためであったと考えられる。

【45】中君の側にいる大輔は、古くからの女房であったとみえる。その関係で、浮舟の母とも親しくしているのである。

【46】中君洗髪の様子は珍しい。大輔の説明「今日過ぎば、この月は日もなし。九、十月はいかでかは」（308）より推定するに、二カ月間も髪を洗わずにいることがあったものと知れる。これはちょっと驚異的である。

- 【47】 こういう卑近な事例を、浮舟の危機の導入としているところ、日常の風景のひとつコマとして、リアルな雰囲気を出そうとしてのことだと思われる。
- 【48】 浮舟が匂宮に発見されたのは、彼女の側に油断がなかったとは言いがたい。彼女は、母と同じように、二条院の庭とそこに出入りする貴族たちに興味津々としていたのではないか。「端近く添い臥してながむるなりけり」(309)とあるように、御簾近くにいて後ろを考慮していない。
- 【49】 匂宮に手を捉えられた時、浮舟は薫かと思ったところは面白い。次の巻で、やはり彼女は、薫かと思って事件に巻き込まれる。その軽い予兆と読めるではないか。
- 【50】 浮舟危機の場。「高き棚厨子一具」立っていて、その辺りに袋に入れた屏風がいくつも立て掛けてある。西面の北側は、物置感覚である。こういう所に場面を設定しているのも、日常性の表示であろう。話のリアルさ。危機の場に相応しい。
- 【51】 乳母は、この場面で、二人の前に「つと添ひゐてまもりたてまつり、引きもかなぐりたてまつりつべく」(312) 頑張っている。
- 【52】 大輔の娘・右近。彼女は、次の巻で活躍する浮舟の侍女・右近とは別人であろう。
- 【53】 「例のけしからぬ御さま」「女の心合はせたまふまじきこと」(311) という右近の心中思惟よりして、このような匂宮の振る舞いは、ここでは、日常的なことであったと知れる。浮舟が、このままいってしまったら、二条院の日常性の中に埋没してしまうということか。事を知らされた中君も思っている。「さぶらふ人々も、すこし若やかによろしきは、見捨てたまふことなく、あやしき人の御癖」(312)。
- 【54】 「いな、まだしかるべし」(313) という右近の言葉も露骨で卑近。
- 【55】 明石中宮の病気の報せで、浮舟は虎口を脱する。明石中宮は「御胸やませたまふ」(312)。とある。大君と同じ病であろうか。軽い狭心症、あるいは重い風邪か。
- 【56】 この事件でもって、中君本人も自覚しているように、中君の信用は失墜する。こういう危険なところには、可愛い娘を置いておけないという母の決断を引き出すのは当然ということか。
- 【57】 危機の場のエピソード。乳母は語る。「降魔の相を出だして、つと見たてまつりつれば、いとむくつけく、下衆下衆しき女とおぼして、手をいといたくつませたまひつる」(314)。作者、余裕の表現。
- 【58】 常陸介の家では、お前は実の娘にばかりかまけて、新婚の娘の面倒をみないと派手な夫婦喧嘩がおこなわれているらしい。
- 【59】 浮舟の信仰は、初瀬の観音(315)。玉鬘の時のように効くだろうか。

【60】浮舟の現在陥っている姿を見て、そうなのもおかしくなかったのに、そうならなかった自分を思う中君。彼女は不満をもちつつも、現状と折れあってゆく道を選択する。中君物語の終わりである。薫の美質を認めつつ、「乱りがわしくおはする」匂宮の妻という現実を受け入れる。彼女は可愛い王子の母なのだ。「世の中はありがたくむつかしげなるものかな」（317）は、中君人生の総括。どこか、空蟬の叫びに似ている。浮舟の母にも似ているではないか。というより、全ての妻に似ているといったほうがよい。ほどほどの幸せ以外幸せはどこにもないのだよ、ということか。

【61】中君の前に出てきた浮舟を見た、中君付きの女房の感想。「これにおぼしきなば、めざましげなることはありなむかし」（319）。女房の予想はよく当たるものだ。次巻の予告。

【62】絵を見せる中君。右近が詞を読む（320）。源氏物語絵巻にある場面だが、浮舟は絵が好きであること記憶しておく。次の巻で、生かされる。

【63】大君によく似ている浮舟を見ての中君の思い。「故姫君は宮の御方ざまに、われは母上に似たてまつりたるところ、古人ども言ふなりしか」（320）。父の理念に殉じた大君。母の論理に従った中君と考えるべきか。そういえば、中君の母は中君出産の、産後のひだちが悪くて死んだ。私の死ぬ原因となったこの子をつらく扱わず大事にしてほしいと、母は八宮に言い残してしんだ。あの言葉は、ここまでかかる言葉であった。

【64】乳母から事態を聞いてやって来た母の行動は素早い。浮舟を、ただちに二条院から三条の小家に引き取る。果敢な性格の人である。その昔、常陸介に走った時もこうだったのだろう。中君に言った「颯のはべらむやうなるこち」（322）「思ほし放つまじき綱」（323）という表現は耳なれぬものだが、田舎者の切迫感がよく出ていて面白い。

【65】中君一族には、かつて苦汁をなめさせられた。今また同様の経験をさせられている。私が馬鹿だったという思いが、母にはある。母にしてみれば、浮舟を自分にしたくないという強迫観念につきうごかされたのだと解釈できる。草子地が、「なま腹立ちやすく、思ひのままにぞすこしありける」（325）と彼女の性向のみに原因を求めるのは片手おちというものである。

【66】自邸に戻った母が、来ていた婿の少将を覗く場面も面白い。場所が変わると、少将も格段に優れて見える。相対性のなせるわざである。別人かと思っていると、少将が匂宮邸のことを話題にする、というのも愉快だ。

【67】母が、少将に、変節をなじる歌を詠む。と、父が八宮とは知らなかったもので、という少将の弁解がある。こうなると、母としては「いかで人とひとしく」という思いにかられるのは当然の成り行きというものであろう。いまにみておれ少将よ、貴種・浮舟はお前ごとき下賤な貴族の相手となる女ではないのだ。もは

や、彼女には、「あいのう大将殿の御さま容貌ぞ、恋しう面影に見ゆる」（327）という局面しか残っていない。かくして、薫登場のための環境は整うこととなる。

【68】母の思い。「世の中のありさまを見聞くに、劣りまさり、いやしうあてなる、品に従ひて、容貌も心もあるべきものなりけり」（328）。浮舟は、はたして「当帝の御かしづき女を得たてまつりたまへらむ人の御目うつし」に耐えられるのか。この時、母の思念の中に大君が無いのはいたしかたなかろう。こちらは、物語の論理。あちらは、現実の論理。

【69】三条の小家で、浮舟は、中君のことを、「若いこちに恋し」（329）と思う。また匂宮のことも、母や乳母ほど悪意に受け取ってはいないのも、またなにもしらぬ「若いこち」のせいである。これは、彼女の将来に女三宮の不安を醸す効果のある条文。

【70】次の、母との贈答の場面も、浮舟の歌について「幼げに言いたる」（330）とある。浮舟は、空蟬のような女ではない。女三宮のようなタイプである。

【71】「宇治の殿堂」は、秋の末「山の紅葉」が美しい頃、完成している。

【72】浮舟の母は、すでに弁に事情を打ち明け、「すこし近きほどならましかば、そこにもわたして心やすかるべきを」（332）と言っている。これは、もう、娘を薫に差し出すも同然の意向表示である。薫が、これに応じるのは、自然な流れというものだろう。据膳を食う、据膳しか食わないのが薫の流儀。

【73】仲介の労をとれ、という薫に、弁が応えた「今さらに伊賀姥（いがたうめ）にや、とつましくてなむ」も面白い表現である。仲人口をきく仲人のことを伊賀姥というのであろうか。この出典は何か。

【74】世間の噂を考慮して、薫は浮舟に手紙を出さない（333）。身分差の意識。こういう意識を薫が保持しているかぎり、母の願いは虚しい願いに止まることが予想される。

【75】正室・女二宮に敬意を払う薫の点描（333～4）。このあたり、作者は、浮舟の社会的評価の実体、相対性を十分に読者に確認させてから浮舟物語に入っている。浮舟の悲劇性を創出するための用意であると考えられる。

【76】そもそも浮舟の物語は、作者がいみじくも言うように「むつかしき私心」（334）の世界なのである。世間の評価は到底得られぬ恋の世界。これは、和泉式部日記と同質の物語なのだと心得ておいたほうがよい。

【77】恋の手引きをするために、宇治を出て三条に赴く弁。二人の恋の仲立ちが、尼だということも、悲劇にふさわしい導入部である。

【78】薫が三条の小家に来て、一夜を過ごし朝の物音を聞くにあたり（336～8）、光源氏が夕顔の宿を訪れた日を思いださせる。浮舟に夕顔のイメージを与えるということは、これからの展開を容易にしよう。これは当代第一の男性二人に愛される女の物語なのである。光源氏と頭中将に愛された夕顔。薫と匂宮に愛される



ことになる浮舟。源氏物語の先祖返りは、源氏物語に額縁を与える効果がある。始めと終わりの呼応。これをもって、光源氏と紫上との純愛は、源氏物語の中心に据えられる。

【79】ずかずかとやって来て、契る。浮舟からみて、薫の行為は、匂宮の行為と何ら変わるところがない。これは浮舟の母が夢想した結婚にはほど遠い。彼女は、匂宮の時そうしたように、宇治に行って娘を引きかなぐって連れ戻してもよい状況である。そうしないのは、薫なら七夕になってもよいという思いが浮舟側にあるためである。最初から白旗かかげた結婚に、零落した者の卑屈さがにじんでいる。かわいそうな浮舟のイメージは徹底している。

【80】薫が浮舟に、「人形の願ひ」（337）を言わず、垣間見から恋に落ちたのだと告白するところ、当然といえば当然であるが、浮舟にたいする優しさを見ることもできよう。

【81】薫と浮舟の結婚が、忌むべき九月であった（338）というのも、悲劇の予感を盛り上げる要素。

【82】その昔、光源氏は、今日の薫と同じように、夕顔を抱いて車に乗せて連れ出した。逃避行の先で夕顔は死んだ。今回、そうならぬという保証はない。これも、悲劇の予感。

【83】宇治まで牛車で行くには、牛一頭では無理。途中で牛を変えねばならぬ。こういう細部も持つ（339）ところ、作者の余裕、懐の深さのうかがえるところである。

【84】車内で、薫は浮舟を抱いている。「石高きあたりは苦しみものを」（339）。薫の優しさがよく出ている条文。朝日のなかを車はすすんでいるのであるから、浮舟の美貌は、薫を十分に引きつけたはずである。

【85】同車の弁が、大君を思って泣く。侍従がものの始めに、尼と一緒にであることを縁起でもないと思う。ともに悲劇の予感へと読み手を導く。

【86】薫も、大君を思って泣く。浮舟と侍従のまわりは涙ばかり。異様な風景。「若き人、あやしう見苦しき世かな、心ゆく道に、いとむつかしきこと添ひたるこちす」（341）るのは当然である。この時、侍従は、この人々にはついてゆけぬ予感がしたのではないか。

【87】浮舟は最初から大君とは違った印象を薫に与えている。大君が「いといとう児めいたるものから、用意の浅からずものしたまひし」という人であったのにたいし、浮舟は「おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ、心もとなかめる」（341）という印象である。作者は、ここで浮舟の不用意さを印象づけている。後のための用意であろう。

【88】浮舟は大君ではない。顔だけにている人形なのである。最初からテーマにずばり切り込んでいる。（341）。

【89】薫は、この浮舟を決して軽く扱うつもりはない。時間をかけて、中君ぐらいの扱いで、三条宮に迎えようと思っている（343）。

【90】「田舎びたるされ心もてつけて、品々しからず、はやりかならましかば、形代不要ならまし」（344）と薫は思い直す。浮舟はとにかく形代の素材としては、合格であったのである。

【91】薫と浮舟との最初の対話の場（344～5）。教養の差が歴然としている。はたして、この結婚、うまくいくや否や。「楚王の台の上の夜の琴の声」（345）と薫は朗詠したが、これが不吉な予告となりそうな感じである。捨てられる秋の扇となる運命がそこはかたなく漂うような印象である。その時、浮舟は運命的というか無邪気というか、たまたま「白き扇をまさぐ」っていたのであるから、この印象、この予感 は 決 定的 な も の で な く て な に か 。

（注）引用した源氏物語本文は、新潮古典集成『源氏物語』（石田譲二・清水好子校注）による。括弧内の数字は、その本文該当箇所を示すものである。